

■藤咲結衣選手による「Snowbell」リリースインタビュー

—2016年くらいから制作していたという件について

藤咲結衣（以下、藤咲）：「はい。今作の説明にあったように BLACK TEARS（前身バンド Purple Fizz による 2015 年リリースのアルバム）の続編として制作をしていった作品でした。ただその時から長期的に作り込みたい気持ちもあり、年月をかけてでも自分の音楽はコレだ、という決定的な完成形にこだわり続けていました。」

STAFF（以下、ST）：「それにしても時間かかりすぎじゃないですか？（笑）」

藤咲：「うーん、2018 年ぐらいには出来そうなつもりでしたけれど、色々回り道したり、当時はコロナだ！自粛だ！と馬鹿な判断ミスで 1 年もストップしたり。この時 Snowbell をもっとじっくり作っていたら他の作品も生み出せなくてバンドはずっと Portliness とか同じ曲やり続けるつまらないバンドになっちゃうなと考えて、先に IP を出したんです。」

ST：「IP ですか？あ～ International Park！！」

藤咲：「そうですね。難易度が低いというわけでもないんだけど、Snowbell より先に完成できそうな曲たちを先にリリースする方向性に変えてから一層この Snowbell の楽曲達はじっくりと煮込むことが出来ました。」

ST：「煮込みハンバーグみたいな感じですか？」

藤咲：「曲は食べ物ではないので、違うと思います....」

—レコーディングに選出されたメンバーについて

藤咲：「なるべく多くのメンバーに 1 曲でも携わってもらいたいという気持ちが強かったですね。チーム型ロックバンドとしてやっている以上、ありきたりなバンドでは意味がないわけですね。かといってワモパ (ONE MORE Purple) がトップバンドであるからには全員参加というのも違う。この作品に携わって欲しいと思えるメンバーに絞ってさらに、任せられるかどうかをじっくり考え選抜していきました。」

—作品の中心人物となるボーカルの選出はどう考えられたのか

藤咲：「エース的なボーカル 1 人だけが全曲を歌うのでは一般的なロックバンドと同じような作品になってしまうし、全曲違うボーカリストというのだとオムニバスアルバムみたいなノリになる。どちらのスタイルもダメだと思っていました。特に前者のスタイルは 1st の IP の時に山下選手メイン曲を多くいれすぎてバランスが悪い作品になってという失敗もしているので。ボーカルは担当の人数がいますがアルバムに選ばれる人数は最小で。」

ST：「作品を通して聞いた時にオムニバスにならないような自然の流れにこだわったと言っていましたね。」

藤咲：「理想はエース的なボーカル 2 名が前半と後半の大枠を 5.6 曲くらいまとまって歌う形にして、その接続部分に他の全然タイプの異なるボーカルや今回なら女性ボーカルも起用しましたし。その理想の形式で無事に 1 つに作品にまとめた時に、違和感ないどころか、しっかりとチームとして作り上げた作品なんだなと感ずることが出来る流れを作れたのは今後の作品づくりにもプラスになったと考えています。この作品で主力として選ばれたボーカルメンバー達は自信持って欲しいですね。」

ST：「確かに作品の前半、中盤、後半、と景色が変わっていくストーリー性が聞いているだけでもしっかりと伝わってくる感じがしますよね。」

—曲順に関しては相当悩み続けたということだが

藤咲：「どのアーティストさんもアルバムの曲順は相当悩んでこだわるとは思いますが、何年もずっと長い間この曲はこっちで、いや、やっぱこっちでとチマチマやり続けたバンドは我々が一番かもしれませんよ。趣味が陸上の長距離、特に駅伝好きですが、区間配置は各監督さん一番悩むところなので、ちょっと似ているかもしれません。」

ST：「往路にはこの選手、復路にはこの人をもって悩む監督ですね」

藤咲：「そう。その例えによれば本来、往路を任せるようなエース的なポジションの曲たちを復路にまわせたのは凄く大きんです。アルバムだとやっぱり序盤の前半 1 曲から 5 曲くらいは絶対に外せない曲たちで固めないと、最後まで聞いてもらえません。それゆえに他のバンドさんの作品などでもよくありますが後半勢いがなくなったり、前半より劣る曲たちが並んで飽きちゃう。結局前半しか聞かないアルバムになっちゃってる、なんてのはよくあるような気がします」

ST：「駅伝での例えがわかりやすく笑っちゃいました (笑)」

藤咲：「往路の1区、2区、3区で一気に先頭に出るような勢いがあっても復路の7区とか8区以降で失速する。そんなレースに近いのがさっき例を上げた作品。逆に後半にメインとなる曲たちを集めすぎて肝心の序盤がつまらないと、そこまで辿り着く前に作品が嫌われたり飽きられたり。ましてや初めて私達のバンドの作品を聞いてくれた方であれば尚更です。序盤でシード権落ち確定の中、復路にエースが3人いるぞ。みたいな感じですかね。」

ST：「マラソンや駅伝の話の時だけ目が輝いてますね」

藤咲：「そんなことはなくて、アルバムの曲順を練る時のほうが輝いていたはず。今思えば昔のBLACK TEARSからそのあたりは意識していて曲順を決めるのは絶妙にナイスな線をいけているのかなというつもりです。あ〜でもIPは曲順ダメだったなあ。今回のSnowbellは前半任せるべき曲たちを後半に回してもなおかつ前半の曲たちも勝負曲として戦えるので全体的に最強です。」

—かなりの自信作になったと受け取れる

藤咲：「SALZ PIT AやCandle Snowは本来1.2曲目に来てもいいようなアルバムの軸となる曲です。雪鳥沢（ユキドリミドリ）もですね。序盤で初めて私達の作品を聞く人たちにこれらエース的な楽曲を届けるほうがウケもいいかもしれない。でもそうすると後半どうなるのか。さっきの例のように失速というか・・・ANOTHER NO FACEやアシオトが後半にいてもぶっちゃけ効果的ではないんですよ。これらは前半のつなぎでめっちゃくちゃいい味を出す役割の位置に収まった。S NOBvELはオープニングだからこそ最大の威力を発揮していますし前作から繋がっていますし。そんなこんなで後半にあれらの曲たちがはまっていたのでこの作品は最高なものに出来たと考えています。」

—S NOBvELは何か深い意味がありそうだが？

藤咲：「スノーベルと語呂があうけどそれとは意味が異なる。まあ同じ意味も含めつつ。ジャケットの通りの意味としても成り立つし。ノベル、ノーベル。あとは、A級戦犯って言葉がありますけどS級って言ってるのはそういうことです。ちょっと言いにくいかな。」

ST：「これは。意味がわからないですよ。」

藤咲：「アルバム全体、歌詞は結構最近（といっても2.3年）書き直して。現在進行形で世の中が悪いほうにバグっていますので。それに対するロック的なアプローチでのメッセージや、それでも諦めずに戦おうというメッセージもあります。」

S級戦犯なノー〇ル みんな騙されるなよというような意味合いが強いかな。
この前の〇〇賞とかめちゃくちゃだったでしょう？」

ST：「批判的なメッセージですね。そんな曲に感じなかったです（笑）」

藤咲：「いや、それだけを伝える単純なモノでもないですからね。Noなモノにダメだと突きつけるだけのロックというのは今の時代のやり方ではないはずですので。色々と気づきのきっかけのひとつになれば嬉しいですし、気づいた結果絶望感に落ち込んで終わりというのも違います。この作品はそうした闇の背景を描きながらもこの先10年、20年と前向きに生きるべきマインドもしっかり包んでいます。アルバムを通して。」

— この作品の完成で燃え尽きちゃうかも と話していたこともあったが

藤咲：「ここで燃え尽きたらそこまでのバンドだってことです。確かに凄くやりきった感もあり達成感もあるけども、完成して満足ではダメです。出雲駅伝に参加が決まった！やっただ。で満足してレースでビリになるのと一緒です。」

ST：「駅伝の例えはもういいです（笑）」

藤咲：「この作品が形になったからにはワンとニヤの存在をもっと色んな音楽好き、ロックバンド好きな人に知ってほしいと本気で思っています。ここからやるべき事はさらに多く出てくるし、アルバム完成で満足してポーッとしていたらいつまでも現状打破は出来ません。燃え尽きないために、実はアルバムに入る予定だった2.3曲をあえて外しています。この先のストーリーでまたそれらと向き合えるようにあえて。だからここで燃え尽きちゃだめなんです。」

— この作品をどんな人達に届けていきたいのか

藤咲：「今、色々きつい現実に気づかされたり、世の中がおかしいなと思っている人たちが増えているはずなんです。不安に思うこともたくさん出てくる。そんな中諦めムードを吹き飛ばせるような前向きなメッセージもこれから発信していくチームにしていくので。こんな悪夢な時代に入ってしまったからこそ音楽の力や魅力、ありがたさを改めて感じていますので、そうした音楽をやれること、出来ることに感謝しつつ様々な人に届けていきたいですね。平和ボケに溺れた悪夢な現在を経て、きっと立て直してみんなで前を向いていくような時がきた時に、私達の音楽やスタイルが希望の轍になれば嬉しいですよ」

ST：「それサザンオールスターズの曲だったような？・・・」